静香ちゃんのクリスマス

猪鹿野　浩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
静香ちゃんのクリスマス

【Ｎコード】
Ｎ５９４８Ｆ

【作者名】
猪鹿野　浩

【あらすじ】
静香ちゃんは小学3年生。お父さんが友達から裏切られたショックで、家を出て行ってしまった。お母さんとアパート暮らしもしたけど、今はお祖父ちゃんの家にいる。転校した新しい学校では、すぐに友達もできた。季節は移り、もうすぐ楽しいクリスマス。お母さんにも言えない小さな夢を静香ちゃんは抱いていた。

三年生の教室。もうすぐ始業時間だというのに生徒達が勝手気ままに走り回っている。特に今日は噂話もあって、いつに増してにぎやかだ。

その噂話とは転校生がやって来るというものだった。生徒の一人が家で聞いてきた話を自慢げに伝え、全員に広まっていた。まだ小学三年生だけに、母親の『これを学校で話しては駄目よ』の言葉は、逆に聞いた子供にとっては注目されるネタになるのだ。秘密が守られるわけはなかった。

チャイムが鳴った。山本先生と一緒に女の子が入って来た。その女の子、酒井静香ちゃんは教壇の横に立つと、興味津々に見詰めている多くの視線にも負けず、まっすぐ正面を見た。この瞬間に静香ちゃんの内気でない性格を何人かの生徒は感じ取った。

「みなさん、新しいお友達を紹介します。酒井　静香ちゃんです。仲良くして下さいね」

山本先生は黒板にさかいしずかと大きく書いた。

静香ちゃんは「酒井　静香です。仲良くして下さい」と、ぺこりと頭を下げた。高学年なら自分の趣味や出身地くらいは話せ、迎える方も質問するが、三年生ではまだ無理な場面だった。静香ちゃんが物怖じせず名前を言えただけでもたいしたものだった。山本先生が拍手をするとみんなも拍手し、転校生を迎える素朴な儀式は無事に終わった。

その頃静香ちゃんの家では、お母さんが壁掛け時計を見てそわそわしていた。学校で静香ちゃんが同級生に紹介されている頃だと思うと、どうしても落ち着けなかった。

「友香さん、大丈夫よ。静香はしっかりした子だから安心なさい」

「でもお義母さん、途中からの転校でしょう。四年生になるまで待てばよかったわ」

「今更そう言っても遅いわ。静香はもう登校したのよ」
「そうですわね。・・・初登校は一緒に行きたかったのに、あの子が『静香は一人で大丈夫』と言うものだから任せましたけど・・・」
「静香のしっかりしたところはあなた似なのよ。文昭に似なくてよかったわ。本当にあの子のせいであなた達に苦労をかけたわ。ごめんなさいね」
秋江が友香に白髪の交じった頭を下げた。そこまでされると友香も焦ってしまう。
「いいえ、お義母さん。あの人の借金をお義父さんに払っていただいて、感謝しています」
「それはもう言わないと約束したでしょう。文昭がお父さんに頭を下げれば済んだものを・・・親子の間でプライドなど何の価値もないわ」
二人は互いに夫と息子の愚痴を言い合った。それでも心底憎しみを込めない口振りに、彼の愛される性格と帰れる余地が十分に残されているのがわかる。こうなったのは、静香ちゃんのお父さんが古い友達の保証人を引き受けたからだ。小さい頃からの友達で、お母さんもよく知っている小さな町工場の社長だった。よく家にもやって来て、幼い静香ちゃんとも遊んでくれた。
保証人を頼まれた時、お父さんはお母さんに相談した。お母さんはかすかな不安を感じた。よく父親から『兄弟でも借金の保証人にはなるな。なる時は自分で払える額までで、もしもの際には恨んではいけない』と教えられていた。少し考えるように言おうとしたが、『友香、俺達はあのメロスとセリヌンティウスも裸足で逃げ出すほどの間柄だ』と、日頃から自慢するお父さんを思うと何も言えなかった。しかし保証する額はお父さんの年収の何倍もあり、事業が失敗して返済を請求されると一度に払えないものであった。
「友香、奴が俺を頼って来たのは初めてだ。俺は奴に頼み事ばかりしていたが、立場がやっと逆になった。奴はああ見えても仕事はできる。大丈夫だ。心配するな」

お父さんは初めて親友から頼まれて興奮していた。お母さんは話を聞いて悪い予感が走った。今まで頼んだことがない親友に借金の保証人を依頼するのは、他の道が閉ざされているからに違いない。しかしお父さんの輝いた顔を見ると、運命の賭に一緒に乗る道を選ぶしかなかった。

二人の運命の賭はものの見事に外れた。保証人になって二ヶ月も立たない内に親友の会社は倒産し、本人も何の挨拶もなしで町から姿を消してしまった。

二人に呆然とする時間はなかった。債権者から返済を迫られたのだ。幸いにも悪徳業者への借金はなく一流の銀行だったが、保証人の立場が変わるものではなかった。しかし一度に払える金額ではなかった。

銀行は真摯に相談に乗ってくれた。お父さんが小さいながらもいい会社に勤めていたことと、真面目な態度が評価されたのだ。残金は長期に渡って分割して支払うことで納得してくれた。その金額なら何とかやっていけそうだった。もちろん家は手放さなければならなかった。

お母さんは安心した。

「お父さん。新婚時代を思い出します。楽しみだわ」

そんなお母さんだった。お父さんは何も言わずお母さんに頭を下げた。

アパートに引っ越した。小さな流しと一間だけの古びた安アパートだった。トイレもお風呂もない。一日中陽が当たらず、かび臭い臭いがした。薄い壁を通して隣の声が聞こえ、誰かが廊下を歩く度にきしんだ音が響いた。

お父さんがいなくなった。

引っ越した翌日、会社に出勤したまま帰らなかった。

お父さんには親友を恨む気持ちはなかった。借金などどうでもよかった。それより何も話さないで姿を消した親友に裏切られ思いがして心の痛手となった。銀行との返済交渉中は気が張り詰めていた

が、それが終わると何もやる気がしなくなった。働く気力もこの町で暮らす自信もなくしていた。
数日後お母さん、両親宛の手紙と離婚届が送られてきた。
お母さんはお父さんを捜さなかった。お父さんの気持ちが痛いほどわかっていたからだ。お母さんは手紙をお父さんの両親に渡し、それまでの経緯を全て話した。お義父さんは初めて息子の過ちを知った。
「友香さん、すまなかった。文昭はわしには一言も打ち明けてくれなかった。文昭とはもう何年も口をきいていない。小さなすれ違いを修復できない内に時が流れ、親子でありながらと他人以上に疎遠な間柄になっていた。息子の借金はわしが返済しよう」
「お義父さん、そんなつもりでお話したわけではありません。困ります」
お母さんは慌てて申し出を断った。お父さんが頼んでいないことを頼むわけにはいかなかった。
「気になさるな。あいつに内緒にすればいいだけの話じゃ。大人の知恵じゃ」
お義父さんは翌日銀行に行き、息子の借金をすべて返済した。それだけでは終わらなかった。その夜お義父とお義母さんは、お母さんの前に何百万もの現金を置き、両手をついて謝った。
「友香さん、全て終わらせた。この金は本来なら息子が払う慰謝料じゃあ。文無し文昭が払える迄待たすわけにもいかぬ。あんたはまだまだ若い。文昭と離婚して新しくやり直しなさい。離婚届も送ってきている」
静香ちゃんのお母さんは立派だった。すぐに両親に言った。
「お義父さん、お義母さん、私は文昭さんを止めませんでした。あの人の嬉しそうな顔を見るとできなかったのです。私は文昭さんを愛しています。必ずあの人は立ち直ります。帰って来るまで一緒に待たせて下さい」
そう言って両親に現金を押し返し、目の前で離婚届を破り捨てた。

両親は涙を流し、お母さんも泣いた。静香ちゃんは大人でも泣くことを知って目をぱちくりさせた。
静香ちゃんとお母さんは、お父さんの両親の町で暮らすことになった。

元気一杯の静香ちゃんにはすぐに友達ができた。隣の家の雄一君だ。
雄一君は静香ちゃん家の引っ越しの日、小さなトラックが着き、荷物が下ろされる様子を飽きずに見ていた。その時お母さんと手をつないで見ていた静香ちゃんと目が合った。静香ちゃんがお母さんに何か話しかけている。お母さんが雄一君に近づいて来た。
「ぼく、何年生？」
「三年生です。おばさん、引っ越して来たの？」
「そうよ。三年生なのね。うちの静香と同級生になるわね。仲良くしてね。静香、こっちにいらっしゃい」
お母さんは呼ばれて静香ちゃんが来た。可愛い静香ちゃんにじっと見られ、雄一君は恥ずかしくて下を向いた。
「酒井静香です。仲良くしてね」
「僕は原田雄一」
自分の名前だけ言うと、駆け出した。それ以上話せなくなったのだ。
「お母さん、お母さん。隣に引っ越しのトラックが着いたよ」
雄一君は大きな声でお母さんに話した。
「酒井さんでしょう。知っているわ。あなたと同じ三年生の女の子がいるでしょう。あさってから登校すると聞いたわ。学校で言わないでね。転校生なんかほとんどいないから、大騒ぎになると大変でしょう。いいわね」
「うん、言わないよ」
その約束は守れなかった。こんな甘い秘密を小さな胸に隠すことは、三年生には無理な話だった。

静香ちゃんは学校でも友達はすぐにできた。家庭の事情などは小さな子供達には無関係だ。明るく元気であれば友達はいつだってできるのだ。時々お父さんのことを思い出して寂しい気持ちになったが、優しいお母さんがいつも包み込んでくれた。

「静香、お父さんはきっと帰ってくるわ。ここで待ちましょうね」

「うん。早くお父さんが帰ってくるといいね」

お母さんの勇気の源は静香ちゃんの笑顔だった。静香ちゃんはお母さんに抱かれると安らいだ気持ちになれた。お父さんを想う二人の気持ちがお互いに支え合っていた。

季節は寒い十二月になった。大人達はコートを着込み、背中を丸めて歩く。しかし寒さは大人だけの敵で、子供とは友達だ。走り回った後の爽快さは、夏より冬の方が何倍も感じある。それに十二月は子供にとって楽しみの多い季節だ。クリスマスとお正月。プレゼントとお年玉。一年一度の子供の楽しみを短い間に二度味わえるのだ。世界の子供達がこれを知ったら、みんな日本に来たがるに違いない。このとんでもない秘密を子供達に知られないように外国の大人達が隠しているのだ。

「静香ちゃん、夕方僕の家を見てごらん。きっとびっくりするよ」

ある日雄一君が謎めいた話をした。

「えっ？雄一君、何？」

静香ちゃんにわけを聞こうとする前にもう駆け出していた。左右に揺れるランドセルを見送るしかなかった。

・・・何だろう？何に私がびっくりするのかな？・・・

夕食を終えて外に出てみた。そして雄一君の家を見た。

静香ちゃんは雄一君の家の変わりように、ぽかんと口を開けてしまった。見慣れた雄一君の家が、大きなクリスマスツリーのようになっていた。

垣根のトナカイとソリに乗った小さなサンタクロース。トナカイの足は宙を飛んでいるように動き、淡い明かりを放つ大きなサンタクロースが玄関前にも置かれている。屋根上の高く輝く大きな星か

ら四方に向かって電線が伸び、赤、青、緑、黄色、紫、ピンクなど、様々な色と形のランプが付けられ、それが消えたり灯ったりして幻想的な世界を作り出している。魔法の国が突然目の前に現れたようだった。

「静香ちゃん、きれいだろう。僕の家だけじゃあなくて回りの家もこうするんだよ。お母さんが『いるみねえちょん』と言っていた。静香ちゃんの家はおじいさん、おばあさんだから今まで飾ってなかったけれど、今年はやってもらうといいよ。僕のお父さんは上手いから頼めば手伝ってくれるよ」

雄一君は自慢気味に説明した。しかし静香ちゃんが思ったより羨ましげに見てないので、少しがっかりした。前に見せた他の同級生が羨ましい様子とは大違いだった。

・・・静香ちゃんはずっと田舎にいたから、この美しさがわからないのかなあ・・・

静香ちゃんの家の玄関からお母さんが出て来た。静香ちゃんが戻って来ないから少し心配になったのだろう。お母さんは静香ちゃんよりも何倍も驚いて雄一君の家を見た。

「まあ綺麗。夢のお家のようね」

その一言で雄一君はすっかり嬉しくなった。

「おばさん、おばさん家も『いるみねえちょん』を付けたら綺麗になるよ。家に使ってないのがあるから、お父さんに頼んであげる」

雄一君はそう言って返事を聞かずに家に走り込んで行く。その後ろ姿をお母さんは笑って見送った。

「ねえ・・・静香。おじいちゃんに頼んでそうしようか？」

「静香はいらない。だってお父さんのクリスマスツリーがあるもの」

静香ちゃんはもうこれ以上見ないという風にして、お母さんの手を引っ張った。お母さんは雄一君の家の方を振り返りながら、夢見る表情を浮かべた。

・・・お父さんと初めてデートしたディズニーランドを思いだすわ。本当にあの人はどこに行ったのかしら？困ったお父さんだこと・・・

翌日は日曜日。静香ちゃんはおじいちゃんとおばあちゃんと買い物に出かけた。いつもならお母さんも一緒なのに、その日に限っては家で留守番になった。静香ちゃんはお母さんがいない時には、おじいちゃんにおねだりができるので、うきうきした気持ちになった。

「お母さん、お土産を買って来るからね」

「ゆっくりしていいのよ。お義父さん、お義母さん、お願いします」

「任せなさい。ゆっくりして来るから頼んだよ」

おじいちゃんはお母さんに片目をつぶってそう言った。静香ちゃんからは見えない合図だったが、お母さんはにっこり笑って頷いた。

デパートまでおじいちゃんの運転する車で向かった。おじいちゃんとおばあちゃんは静香ちゃんをとても可愛がっている。それに静香ちゃんとのドライブをとても楽しみにしていた。二人だけの時以上に会話が弾む。学校のこと、友達のこと、好きなことをいろいろ聞いてくる。そしてデパートに近づくと決まって聞くのが、「静香ちゃんは今何が欲しいの？」って嬉しい質問だった。

夕方になった。デパートで食事して、お人形をプレゼントされた静香ちゃんは大満足で帰って来た。家の外ではお母さんが待っていた。隣には雄一君と雄一君のお父さん、お母さんもいた。

車から降りた静香ちゃんはお母さんに抱きついた。やっぱりお母さんが一番だ。

「静香はデパートでランチを食べたよ。お人形も買ってもらった」

「よかったわね。お母さんも静香ちゃんにプレゼントがあるのよ。今からあげるからお家を見ていて。カウントダウンしま～す。十、九・・・三、二、一、ゼロ」

静香ちゃんは何が起きるのかと家を見ていた。ゼロになった瞬間、お家が雄一君の家と同じように『いるみねえちょん』で輝いた。雄一君の家ほど派手ではないが、それでも十分見栄えはする。おじいちゃんもおばあちゃんも笑顔で見ていた。

「気に入った？雄一君のお父さんとお母さん、そして私。もちろん

雄一君も手伝ってくれたわ。一日がかりで大変だったのよ」
　静香ちゃんは黙って家を見ている。お母さんは何も言わない静香ちゃんが驚いて言葉が出ないのだろうと思った。
「お母さんのばか！『いるみねえちょん』なんかいらないわ」
　静香ちゃんは泣きながら家の中に駆け込んだ。残されたみんなは顔を見合わせ、気まずい思いをした。お母さんは雄一君の家族に頭を下げた。

　静香ちゃんが初めて学校を休んだ。翌々日も休んだ。山本先生は静香ちゃんが病気になったとだけ告げた。雄一君は『いるみねえちょん』の時の静香ちゃんの様子を見ていただけに、あのことが休む理由だと思った。
　家に帰ってみると静香ちゃんの家の『いるみねえちょん』が取り外されていた。お母さんは「静香ちゃんのお母さんが来て『せっかく貸していただいたのに申し訳ありません』と返しにみえたわ。雄一、そのお菓子を食べてもいいわ」
「いらないよ、こんな物」
　雄一君はお母さんにそのお菓子を投げつけ、部屋に閉じこもった。涙が止まらない。せっかく静香ちゃんのために一生懸命やったのにと思うと悔しかったのだ。
　雄一君は夕食になっても部屋から出なかった。出ないというより鍵を掛けて閉じこもってしまった。翌日お母さんは雄一君の休みを山本先生に電話する羽目になった。
　コンコンとドアをノックする音が聞こえた。どうせお母さんだろうと思って雄一君は返事をしなかった。
「雄一君、私を部屋に入れて。私が『いるみねえちょん』を外してもらったわけを話すわ」
　思ってもいなかった静香ちゃんの声がした。雄一君はドアを小さく開けて、静香ちゃん一人だけと確かめてから部屋のドアを開けた。静香ちゃんは長細い箱を大事そうに持っていた。

「雄一君、ごめんなさい。『いるみねえちょん』を付ける大変さをお母さんから聞いたわ」
雄一君は返事をしない。怒った顔で静香ちゃんを見ている。
「謝んなくてもいいよ。余計なことをしたんだから」
口をとがらせた。電球を付けるために木に登った時の小さな引っ掻き傷が静香ちゃんにも見えた。
「ごめんなさい、ごめんなさい」
静香ちゃんの目から大粒の涙が溢れ落ちる。今度は雄一君が慌てた。女の子を泣かせるのは悪いことだといつもお父さんやお母さんから言われていたのだ。
「気にしていないよ。もう泣くな」
「うん」
「静香ちゃん、その箱は何？」
「これ？これを見せればわかってくれると思うわ。見て」
静香ちゃんが箱の蓋を開けて中を見せた。中には小さなクリスマスツリーが入っていた。
「静香はこのツリーを飾りたかったの。だっていなくなったお父さんといつも一緒に飾っていたから。お父さんがね、『窓にこれが飾ってあると思うと、どんなに遠くにいても帰りたくなる』って言ったの。お父さんはクリスマスの夜は必ず一緒にいてくれた。少しお酒臭い時もあったけどね」
初めて静香ちゃんの気持ちがわかった。静香ちゃんは『いるみねえちょん』を嫌っているのではない。小さなクリスマスツリーにお父さんが帰る願いを込めているのだ。みんなが輝く『いるみねえちょん』に目を奪われて、お父さんのことを忘れていると思ったのだ。
雄一君は静香ちゃんを手伝って組み立てた。小さな星やサンタクロース、豆電球を取り付け、最後に乾電池を四個つないでスイッチを入れた。部屋の電気を消すとチカチカ点滅する明かりがとてもきれいだ。
「お父さん、早く帰ってきて」

静香ちゃんが両手を組んで願いを言った。
「お父さん、お母さん、ごめんなさい」
雄一君は両親に静香ちゃんの話をした。お父さんとお母さんとのいつでも一緒にいられる大切さを静香ちゃんから教えられ、わがままなことをして困らせたことを謝ったのだ。二人とも黙って話を聞いた後で、雄一君を抱きしめてくれた。お父さんもお母さんも泣いていた。小さな雄一君にはなぜだかわからなかった。

今日はクリスマスイブ。雄一君の家で両家一緒にパーティをすることになった。初めは静かなパーティだったが、お酒を飲んで盛り上がると大人達だけの世界になった。静香ちゃんと雄一君は家を抜け出して、『いるみねえちょん』のない静香ちゃんの家に戻った。居間の出窓にお父さんのツリーが輝いている。電気を消して二人だけで見ていた。
「ねえ静香ちゃん。周りのお家がみんな『いるみねえちょん』でキラキラしているよ。お父さんにこのツリーが見えるのかなあ？そこで僕はいい考えを思いついたよ」
雄一君は静香ちゃんにはさみを見せた。お母さんの使う大きなはさみだった。電気コードを切る気に違いなかった。
「駄目よ。電気でしびれてしまうわ」
「そうか・・・じゃあ僕、サンタクロースさんに『プレゼントはいりませんから、鈴鹿ちゃんのお父さんを早く帰して下さい』と頼むよ。それならいいだろう」
「ありがとう。静香も一緒にお願いしていい？」
「いいよ。サンタさんに届くように大声で叫ぼうよ」
「うん」
「サンタクロースさん、プレゼントはお父さん！」
二人の声が窓を突き抜ける。
二人は知らなかったが、願いはサンタさんに届いた。サンタさんは子供達の心の声が聞けるのだ。口に出さなくても、よい子がプレ

ゼントを願うだけで耳に届く。心の清らかな雄一君と静香ちゃんの大きな声はサンタさんの耳に飛び込んだ。あまりに大きな声だったからトナカイも驚き、もう少しで地上にサンタさんを落としそうになった。世界中の子供達からプレゼントを聞いているが、「プレゼントはお父さん」は初めてだった。

・・・いやはや驚いた。よしよし、その願いをかなえてあげよう・・・

突然静香ちゃんの家の周辺が停電になった。蝋燭を灯してパーティは続けられたが、『いるみねえちょん』はみんな消えてしまった。ただ一つ、静香ちゃんのツリーは輝き続けた。乾電池を使っているから、停電になっても消えなかった。窓辺に置かれたツリーは遠くからでもはっきりと見えた。小さな電球の点滅が弱々しいが、静香ちゃんの夢がキラキラとそこに灯っていた。

静香ちゃんは知らなかったが、そのツリーを目指してゆっくりちかづく人影があった。黒いコートを着込み、首にマフラーをしている。手にはケーキとプレゼントを抱え、雪道を急ぎ足で歩いて来る。

静香ちゃんのお父さんだった。長い時間をかけ、やっと心の整理ができたのだ。

家族と離れて最初は重荷を下ろしたような気がしたが、日が経つに従って虚ろな気持ちになった。そして友達を失った悲しみを癒してくれるのは、お母さんや静香ちゃんの他にいないことに気づいた。やさしいお母さんの顔とかわいい娘の顔。無性に二人に会いたくなった。もう我慢できないほどに。

アパートの電話番号は覚えていた。さんざん迷ったあげくようやくお父さんは電話をかけた。小さなアパートでは大家さんのところにしか電話はなく、かえってお父さんには好都合だった。長い呼び出しの後、電話口に出た大家さんは

「酒井さん？酒井さんはアパートを出ましたよ。何でも御主人の実家でお暮らしになるとか」

と教えてくれた。お父さんは実家に電話をかけた。

「はい。酒井です」
お祖母ちゃんが電話に出た。お父さんのお母さんだ。お父さんはどう話していいのか迷った。言葉が出ず、黙り込んでしまった。
「もしもし、どなたですか？」
お母さんの声が呼びかける。お母さんは不思議な電話に戸惑ったが、息子ではないかという予感がした。電話が切れる前に呼びかけた。
「文昭かい？早く帰っておいで。友香さんも静香ちゃんもこっちに引っ越して来た。お前の借金もお父さんが片付けたよ。友香さんはお前の離婚届を破り、いつまでも待つといってくれた。新しい年ももうすぐだよ。やり直せばいいでしょう。すぐに帰ってきなさい」
電話は切れた。お母さんはこの電話のことはお父さんにも話さなかった。でも母親の勘できっと息子は帰ってくるだろうと思った。
「帰ろう。友香が許してくれるならやり直そう」
お父さんは住んでいるアパートの大家さんにわけを話し、鍵を返した。世話好きな大家さんも喜んでくれた。
「何かわけありだと思っていました。きっと奥さんも許してくれますよ。家族で暮らすのが一番です。荷物は私が責任を持ってお送りします。さあ早くお帰りなさい」
お父さんは急いで駅に向かった。
電車に長い時間乗って、ようやく町に戻って来た。生まれ育った懐かしい駅のたたずまい、駅から続く商店街。昔住んでいた頃と何一つ変わっていなかった。
商店街を歩くお父さん。昔なじみの人と出くわすのが怖くて、下を向いたままだった。町まで帰る勇気は戻っていたが、今の暮らしを根掘り葉掘り聞かれるのは嫌だった。でも・この商店街を抜けなければ、家には帰れない。
・・・お願いだ。顔見知りに会わないように・・・
自分の足元しかみていなかった。
どしん！

とうとうお父さんは誰かにぶつかってしまった。
「すみません。失礼しました」
お父さんは頭を下げて謝った。そのまま下を向き続けるわけにもいかず、顔を上げた。
「えっ！あなたは・・・」
お父さんは目を丸くした。それもそのはず。真っ赤な服と帽子、真っ白なひげをはやした大男が立っていた。
「メリー・クリスマス。ケーキはどうですか？お子様が喜びますよ」
「ケーキだって？」
お父さんは初めて今日がクリスマスだと気づいた。心を病んで部屋に閉じこもっていたせいで、周りの出来事に無関心だった。そういえば足早に行く人の多くがケーキやプレゼントを手にしている。帰りを待つ家族や恋人との楽しい時間を思いやっているのだろうか、どの人の顔にも優しい表情が浮かんでいる。耳にも聞き慣れたクリスマスソングが洪水のように流れ込んでくる。
「そうか・・・クリスマスか・・・よし、ケーキをもらうよ。そうだ。おもちゃ屋さんにも寄ろう」
お父さんはケーキと静香ちゃんの好きなぬいぐるみを買った。静香ちゃんの喜ぶ顔を思うと口元が緩んだ。
サンタさんは空から地上を見ていた。お父さんの足取りが軽くなり、笑顔が浮かんでいるのがはっきりと見えた。
・・・静香ちゃん、もうすぐだよ。お父さんはそこまで来ている・・・
お父さんが家に着いた。玄関に近づく。呼び鈴を鳴らそうと手を伸ばす。でも手が止まった。最後の勇気が出てこない。玄関前で行ったり来たりするお父さん。見ているサンタさんは苦笑いした。
「やれやら、困ったお方じゃ。それ！」
サンタさんは勇気という見えないプレゼントをお父さんに贈った。届くと同時にお父さんは呼び鈴を鳴らした。いつも鳴らしていた三つ短く、一つ長く。

「お父さんだ。お父さんだ」
静香ちゃんが表に飛び出して行く。雄一君はみんなに知らせるために裸足で駆けた。雄一君の知らせを聞いて、表に出てみると静香ちゃんを抱き上げたお父さんが、ばつが悪そうな顔をして立っていた。
「お帰りなさい」
お母さんはお父さんの胸にそっと身を寄せた。お母さんを抱きしめるお父さん。
「すまない。帰って来たよ」
サンタさんは静香ちゃん、お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんが抱き合う姿を見て満足した。
停電した中でも窓辺の小さなツリーが輝きを増したようだ。乾電池の力だけではない明るさだった。きっと家族の絆の力が流れ込んでいるのだろう。サンタさんは派手でけばけばしい近頃流行りの『いるみねえちょん』は大嫌いだ。目がちかちかする家には近寄れず、いい子がいるのにプレゼントを届けないこともあった。淡い明かりの中で静かに祝う家の子供達には、望み通りのプレゼントを届けた。だから今晩は大きなプレゼントになった。お父さんには勇気を、お母さんには愛を、静香ちゃんには夢を、おじいちゃん、おばあちゃんには安らぎだった。
・・・おっと・・・雄一君。君を忘れていた。少し『いるみねえちょん』が派手だけど、君の優しさは十分伝わったよ。君には静香ちゃんの恋心をプレゼントしよう。今は小さいけど大きくできるかどうかは君次第だよ・・・
「メリー・クリスマス」・・・鈴の軽快な響きを残して、サンタさんが夜空を駆ける。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5948f/

静香ちゃんのクリスマス

2010年10月8日15時31分発行